

## HI 盃復活前後の思い出

白木 小一郎

東西対抗の末席位に、而も出たり出なかつたりしていた私には戦前のことは全く判らない。先輩の方々の書かれるであろう昔話を読むのを楽しみにしている。南方、中国と約四年を過ぎ、戦後一年程経って引揚げて来たが勿論テニスなどは思いもよらない。上海では終戦後でも一、二ヶ月はこっそりテニスもやれた。山岸成一さんなどにはよく教えてもらったものであった。戦争中の南方地域は内地と異なり我々の手にボールも割合よく入ったし、又日本時間を採用していた関係で、マニラでも八時半頃まで明るく毎日テニスを楽しみ内地の球友に羨ましがられたものであった。

そんなところから引揚げてきてみたものの食い物に追れて生きて行くのが精々で、テニスのことなど忘れていたが、廿二年に入つた頃なつかしい染井のコートでテニスが出来ると言う朗報が大淵大先輩から伝えられた。同氏をかしらに、亡くなられた東京海上の平野さんと私の三名が戦後最初の常連、日曜には弁当をさげて染井に集つたものであった。そのうちに河尻、石井の両兄、銀行では吉田先輩、片岡、高宮の両

兄、金商の藤倉君等が段々常連に加わつてきた。岩崎様に御出でを願ひ、第一回の懇親テニスを会を染井で催したのが確か廿二年の秋だったと記憶する。第一回は当時在京の先輩の方々が多く岩崎様の外には関沢、間、吉田、大淵、向井(故人)、河尻、石井、藤倉、平野(故人)等の方々が中心、その後野村さんが福岡から帰られ、中野(当時三菱鋼材)、志村、向井(化成)鹿島、東京海上の両田中、山岸、高宮、片岡、浅田の諸名手、往年の三菱庭球同好会のメンバーが段々集つて来た様に思い出される。

その頃になると財閥解体が進行して養和会も三菱以外のメンバーを続々加えることとなり、続いて関係各社が夫々のテニスコートを単独に作り出してくる。斯くては長い伝統のある、而も三菱スポーツの中核たる同好会も消えてしまふということ、先輩各位相諮り戦前のHI盃復活の話が纏つた次第である。幸い銀行が武蔵野に三面コートを持っていたのを強力にたのみ五面に増してもらひ、バレー、バスケット用の分をテニスに流用して計七面、三菱金属の吉祥寺のコート三面をも借用して、第一回の大会が開催されたのが廿七年の九月であった。HI盃、東西対抗は戦前通り外に百才トーナメントを新設して先輩各位の参加を狙つた訳であつた。

戦後HI盃が他運動部に魁けて復活したのは岩崎様の御意志によるものではあるが、実際に努力されたのは野村、大淵、石井、牧野の諸

兄、その使い走りは小生の様におぼえている。その後浅田君が実行担当者となつた。第一回の懇親会はニュー・トウキョウでビールパーティー当時としてはこれだけの準備をすることも大変な骨折りであったが、その後逐年隆盛をきわめたことは御同慶に堪えない。第一回復活大会で最も印象に残つた事件は、百才トーナメントの決勝、岩崎・山岸組対富田・河尻組の熱戦で、勝敗全く予想の出来ない接戦となり、宵闇迫る武蔵野コート全員歓呼の裡に岩崎・山岸組の勝利となつた。今尚、語り草の名勝負であつた。

